中等部第１回

国　語

令和５年２月１日実施

50分

2023年度

〔受験上の注意〕

一、問題は〔一〕・〔二〕があります。

二、解答時間は五十分です。

三、解答用紙はこの冊子の最後にあります。キリトリ線より切りはなしてください。解答は解答用紙の所定のところに書いてください。

四、問題用紙・解答用紙に、受験番号・氏名を記入してください。

受験番号	氏　　名

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文には表記を変えたり省略したりした部分があります。

二十四歳の紀久子は、勤めていた会社を先月退職し、駅前の「川原崎花店」でアルバイトをしている。ここ三日間、中学生らしき少年が毎日店に現れ、熱心に花を見ては帰っていく。話を聞くと、引っ越してしまう幼なじみに贈るための花を探している、と言った。その後、電気三輪自動車（ラヴィアンローズ号）で花の配達中、背後から紀久子を呼ぶ声が聞こえた。

「紀久子さぁん、待ってくださぁい」

ドアがないから当然ドアミラーもなく、うしろを確認する術がない。紀久子は車を路肩に停めて振りむくと、野球のユニフォームを身にまとった子が、猛ダッシュで走ってくるのが見えた。

「す、すみません」

追いついてから野球帽をとったその顔は、あきらかに女の子だった。しかも紀久子は彼女に見覚えがあった。

「あなた、※馬淵先生のお孫さんじゃない？」

「はい、鯨沼中学二年三組で、キラキラヶ丘サンシャインズの四番キャッチャー、馬淵千尋です」

えらく［　X　］自己紹介だ。

馬淵先生の自宅へ花材を配達にいった際、紀久子は千尋と何度か会っていた。馬淵先生に生け花を習い、教室の手伝いをしているのだが、細身で小柄な祖母とちがい、大柄で肩幅が広く、がっちりした体格だった。はじめて見たと

きはジャージ姿だったので、高校生くらいの男子だと思ったほどである。
馬淵先生の母親の名前が平仮名でいち、先生が十に重ねるで十重、ひとり娘は百の花で百花、孫娘が千尋だと、先生本人から聞いている。ひとり娘の百花が十年ほど前に離婚し、子どもを連れて出戻ってきたこともだ。孫の千尋が、地元の少女野球チームにショゾクしている話も聞いた覚えがあった。それだけ［　Y　］というか、自分の話をするのが好きなのだ。
「じつはお訊きしたいことがあって」
「なにかしら」
「ウチのクラスに宇田川という男子がいまして、坊主頭というくらいしか特徴がないのですが」
「戸部ボクシングジムに通っている？」
「そうです。でもどうしてそれを？」
「宇田川くんかどうかはわからないけど、ウチの店にきた坊主頭の男の子が、戸部ボクシングジムのTシャツを着ていたわ」
「間違いなく宇田川です。ジムでも学校でも坊主頭は俺だけだって言ってましたんで。アイツ、いや、彼はあなたの店でなんの花を買おうとしていましたか」
「なんでそれを知りたいの？」
「な、なんでって言われましても」
聞き返されるのが［　Z　］だったらしい。戸惑いと焦りが入り混じった彼女の表情を見て、紀久子の心が動く。坊主頭の彼に抱いたのとおなじく、少しでも力になってあげたいと思った。

「よかったら詳しく話を聞かせてちょうだい」配達はすでにおえており、あとは店へ帰るだけだったのだ。「事と次第では協力してあげる。花屋としてできる範囲でよければだけどね」
紀久子の申し出は、さらに意外だったようだ。千尋は①少しためらいながら、「お願いします」と言った。
「この先にある細道を左に入って少しいくと、小さいけど、雰囲気のいい公園があります。そこで話を聞いてください」
「一年のときからバッテリーを組んでいたピッチャーの西って子が、今度の土曜に引っ越しちゃうんです」公園に着いて、木陰のベンチに横並びに腰かけるや否や、千尋は話しはじめた。西はおなじ中学で同学年だが、クラスはべつだという。「西と宇田川は道を挟んだむかい同士の家で、保育園の頃からずっといっしょの幼なじみでして」
「西さんって、野球以外にもピアノをやってる？」
「やってます」千尋がハッとした表情になる。「宇田川は西についてあなたに話したんですか」
「幼なじみが引っ越しをするから、花をあげなくちゃいけないって。でも名前はださなかったよ。どんな花がいいか訊ねたら、幼なじみなのにわからないのかって言われたんでしょ」さらに紀久子は宇田川が三日連続で川原崎花店を訪れ、今朝は自分が応対したことと、そのときの会話の内容も手短かに話した。「彼がウチの店で花を買おうとしていたのを、どうしてあなたは知っているの？」
「クラスで仲いい友達数人とのグループLINEに一昨日、〈宇田川見っけ〉ってアイツが花屋の前にいる写真が送られてきたんです」千尋はスマホをだして写真を見せてくれたうえに、「宇田川は女子にけっこう人気なんですよ」と付け足すように言った。それが不満であるかのような口ぶりだった。

国1

「西の話では、お別れに欲しいものはないかって宇田川に言われて、それぐらい自分で決めろよとカチンときて、黙ったままでいたらしいんです。宇田川は莫迦で空気が読めないんで、しつこく訊ねてきた。だから適当に花と答えると、どんな花がいいのだとさらに訊いてくるものだから、幼なじみなのにわからないのかと言い返してしまったとかで」

「なにそれ?」

「私も西から話を聞いたとき、そう言いました。いつもそうなんです、あのふたり。西ったらめちゃくちゃ成績がいいクセして、そういうところは宇田川とおなじくらい莫迦なんです。莫迦同士お似合いなんだから、最後くらいは素直になればいいのに」

恋愛と呼ぶにはあまりに拙い話に、紀久子は自分の頬が緩んでいくのに気づいた。でも千尋は真剣だ。宇田川も西も、彼女とおなじくらい真剣にちがいない。そう考えると笑うのは失礼だと、紀久子は表情を引き締めた。

「でも莫迦で素直じゃないけど(b)タンジュンなんで、宇田川からどんな花をもらっても、西はよろこぶはずなんです。そこがまた問題で」

「どうして?」

「宇田川はいっぺん悩みだすと、なかなか結論がだせずにヘマをしでかすんですよ。切羽詰まると尚更です。ボクシングの試合でも、ここぞというときに大振りのパンチをだして、相手のパンチをまともに食らって負けちゃうヤツなんです。それが本人にすれば(c)カイシンの一撃のつもりってとこが、じつに間抜けで。今回もやりかねません。たとえばお店でいちばん高い花はなんですか」

「胡蝶蘭かな」

「西が好きな花が思いだせず、そもそもないのだから思いだしようがないんですが、だったら花屋でいちばん高い花を渡せば文句あるまいと胡蝶蘭を買いかねません」

「そんな莫迦な」

「莫迦だからするんです。どんな花でもいいからって、別れ際に胡蝶蘭を手渡されたら引きますよね」

それはそうだ。

「ですからお願いです。②そんな真似だけはさせないで、ごくふつうであたりまえの花を売ってもらえませんか」

「わかった」

花屋としてできる範囲ではある。千尋を安心させるために、紀久子はにっこり微笑んだ。

「この店にある花をぜんぶ一本ずつください」

三日後の土曜、西が引っ越しをするはずの日の午後一時過ぎ、③勢い込んで川原崎花店に入ってくるなり、宇田川はそう言った。

「どういうこと?」

床に落ちた花びらや葉を箒で集めていた紀久子は、その手を止めた。※光代さんは休みで、※芳賀は三階でランチを食べている。売場にはあと李多しかおらず、彼女は作業台で〈花天使〉経由で注文のブーケをつくっている最中だった。

「親に頼んで、昔の写真や動画を見て確認したんですけど、幼なじみに花を渡しているところなんかどこにもなくて、それであの、いろんな花を買えば、そのうちのどれかは当たっているかもしれないと思って」

胡蝶蘭ではなかったにせよ、千尋の心配は的中したわけだ。

「ぜんぶ一本ずつにしたって、けっこうな値段になるわよ。それでもいいの？」
「かまいません。自分の全財産持ってきました」
「いくら？」
「四万七千六百円です」
あの子に花を売ったら、その同額の特別手当をだしてあげてもいいわ。
三日前、李多にそう言われたのを紀久子は思いだす。いや、駄目だ。ここは千尋との約束どおり、なんとかして、ごくふつうであたりまえの花を売るべきだろう。
でもどうやって？
④「そんな花束をもらっても、相手はよろこぶとは思えないけどな。花もかわいそうよ」
ブーケをつくりながら李多が言った。注意はしているものの、その口調はのどかで優しくもあった。自分がいないときに、宇田川がきたらと思い、スタッフ三人には、千尋から聞いた話は伝えてあった。
「な、なんでですか」
聞き返す宇田川は、動揺を隠し切れずにいる。
「きみ、戸部ボクシングジムの練習生よね」
「そ、そうですが」
「ボクシングだって、どれだけ乱打しても相手に効かなくちゃ意味がないでしょ。それよりも自分がこれだと決めた一撃を打つべきよね。つまりどの花がいいか、きみ自身が決めるべきじゃない？」
「だけどその花が西の欲しい花じゃなかったらどうするんです？」

幼なじみではなく西とはっきり名前を言った。だが宇田川本人は気づいてないらしい。
「相手が欲しいという気持ちよりも、きみがあげたいという気持ちのほうが勝ればいいの。そうすればもらう相手もよろこばすことができるわ」
宇田川は※虚を衝かれた顔つきになる。そして店内を見回してから表にでて、店頭に並ぶ花の前に立つ。売行きが好調で、今日もヒマワリだらけだ。紀久子は彼のあとを追う。
「これをください」宇田川が指差したのは〈マティスのひまわり〉だった。「はじめて見たときから、彼女にぴったりな花だと思っていたんです」
「私もこのひまわり、好きです」紀久子はすぐさま同意した。「いいと思います」
八重咲きのヒマワリでたくさんの花弁が重なり、たてがみに見える。他のと比べると色が濃いうえに大輪で、荒々しくも逞しい、それでいて美しくて眩しいヒマワリだった。
「ありがとうございます」
「何本にします？」
⑤「三本っ」作業台のむこうから李多が言った。「ヒマワリだったら三本がちょうどいいわ。三本になさいな」
はたして〈マティスのひまわり〉を西がよろこんでくれたのか、そもそも宇田川はきちんと渡すことができたのか、花屋としては知る由もない。
だが数日後、花の配達でラヴィアンローズを走らせていたときだ。
「紀久子さぁぁん」

国1

交差点で信号待ちをしていると、千尋の呼ぶ声が聞こえてきた。斜向かいの歩道で、おなじユニフォームを着た子達十人ほどといっしょに信号待ちをしていた。

「先日はありがとうございましたぁぁ」

脱いだ帽子を振る千尋を見て、紀久子は寺山修司の短歌を思いだした。

〈列車にて遠く見ている向日葵は少年のふる帽子のごとし〉

列車ではなく電気三輪自動車だし、少年ではなく少女だ。短歌の帽子は麦わら帽子で、野球帽ではあるまい。それにヒマワリが帽子を振る少年みたいに見えたというのと、まるで逆だった。

千尋が〈向日葵〉に見えた。

トルコギキョウやグラジオラスなどは、花の色で花言葉がちがうが、ヒマワリは本数でちがった。九百九十九本は何度生まれ変わってもきみを愛する、百八本は結婚しよう、九十九本は永遠の愛、十一本は最愛、七本はひそかな愛、一本だけだと一目惚れという具合にである。

そして三本は。

愛の告白だった。

（山本幸久『花屋さんが言うことには』ポプラ社）

※馬淵先生……華道の先生で、川原崎花店の四十年来のお得意様。
※光代さん・芳賀……それぞれ、川原崎花店のベテラン職員と、アルバイトの男性。
※李多……「川原崎花店」を祖父母から引き継いで営んでいるオーナー。紀久子を、川原崎花店に誘ってくれた。
※虚を衝かれた……不意をつかれた。
※寺山修司の短歌……先日光代さんが教えてくれた、寺山修司（歌人、詩人、演出家。一九三五～一九八三）の短歌。

問一 ═══線部（a）～（c）のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 □ X・Yに入れるのに適切な語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

X　ア　まじめな　イ　元気な　ウ　丁寧な　エ　正直な　オ　ぶっきらぼうな

Y　ア　おしゃべり　イ　複雑　ウ　開放的　エ　うわさ好き　オ　正直

問三 □ Z に入れるのに適切な漢字二字の熟語を、本文中から探して答えなさい。

問四 ═══線部①「少しためらいながら」とありますが、このときの千尋の様子や心情の説明としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　突然具体的な状況を説明することになったので、気持ちを落ち着かせて話そうとしている。
イ　紀久子に今の状況をどのように説明したらよいか、あれこれと思いをめぐらせている。
ウ　紀久子からの突然の協力の申し入れに、事情を話そうかどうか迷って決心がつきかねている。
エ　紀久子に突然自分たちの状況を説明しても理解してもらえるかどうか、不安を感じている。
オ　西や宇田川に何も知らせず他人にこの話をしてもよいものかどうか、迷いを感じている。

問五 ═══線部②「そんな真似」とありますが、どのようなことですか。説明しなさい。

国1

問六　――線部③「勢い込んで」とありますが、このときの宇田川の様子や心情の説明としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　今から自分が買うたくさんの花がきっと西を喜ばせてくれると確信し、自信に満ちあふれている。
イ　今日引っ越してしまう西のことを考えて、さびしさと戸惑いが入り混じった気持ちになっている。
ウ　全財産をもって誰かのために花を買うという初めての行為に、喜びとともに緊張感をいだいている。
エ　店にあるすべての花を一本ずつ買うという決心を実行に移すため、気持ちを奮い立たせている。
オ　女の子のために花を買うという行為に照れくささを感じ、それを隠すために意気込んでみせている。

問七　――線部④「そんな花束をもらっても、相手はよろこぶとは思えないけどな。」とありますが、それではどのようにすればよいと李多は考えていますか。理由とともに説明しなさい。

問八　――線部⑤「『三本っ』作業台のむこうから李多が言った。」とありますが、このときの李多の心情を説明したものとしてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　不器用な宇田川のために、西への思いを告げる場を設けてあげたいという思いを込めている。
イ　その本数が持つ意味を宇田川と西は知らないだろうが、二人の恋を応援する気持ちを込めている。
ウ　すぐに決断できない宇田川に代わって、自分がてきぱきと物事を進めようという思いを込めている。
エ　後日、その意味を二人が知り、お互いの気持ちを確かめあってほしいという願いを込めている。
オ　本数が持つ意味もあるが、三本がバランスとして美しいと思う花屋としての気持ちを込めている。

問九　この文章の内容や表現についての説明として適切なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア　中学生の恋や友情など、青春の象徴ともいえる出来事を、ヒマワリの花や花言葉・ヒマワリを詠んだ短歌などを効果的に用いて描き、さわやかな読後感を与えている。
イ　千尋・西・宇田川の、三人それぞれの状況が、一週間という短い期間でめまぐるしく変化していく様子が、過去の思い出を交えながら丁寧に描かれている。
ウ　宇田川と千尋の話をそれぞれ聞いて心動かされた紀久子は三人のために奮闘するが、最終的に良いアドバイスができず残念に思っている。
エ　互いに思いを寄せているであろう西と宇田川のことを、あれこれ心配し世話を焼く千尋の様子が、紀久子の視点から描き出されている。
オ　中学生三人が、今の自分と向き合いながら成長していく姿が、会話文を用いた臨場感あふれる描写によっていきいきと表現されている。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文には表記を変えたり省略したりした部分があります。

前世紀の終わりから今世紀の初めにかけて、ボクはニューヨークで暮らしました。知人一人いない街に飛びこんだのですから、当初は崩れ落ちそうになるほどの孤独にさいなまれました。それでも三年近くもの間、あの街でやってこられたのは、数人の友人ができたお陰だったと思います。結果的には日米混成のバンドを組め、ニューヨークのいくつかのライブハウスで歌えたことは良い思い出になっています。ただ、人は調子に乗るもので、やっているうちに欲が出てきて、ニューヨークで結成したこのバンドを日本でデビューさせようという話になりました。

問題はベーシストでした。彼はアメリカ人だったので、日本での彼のキョジュウや査証をめぐってさまざまな問題が起きました。それだけに、日本で暮らす覚悟を決めてくれたベーシストに対し、ボクらは深く感謝をしました。彼が来日してすぐ、知っている寿司店に連れていったのも、歓迎の気持ちからです。

そこで言葉に関し、とても印象的なことが起きました。

ベーシストにとって、日本の本格的な寿司店に入るのは初めてのこと。カウンター席に座った彼はなにを注文していいかわからず、ガラスの保冷ケースに入った寿司ネタをおずおずと指さします。ボクはいちいち、それはカンパチというんだよ、それはハマチ、それはサバ、それはアジ、といった具合に魚の名前を言っていきました。

彼はずいぶんと食べました。回転寿司ではないので大奮発です。でも、「おいしい」と日本語で連発してくれたので、こちらの気分も盛り上がりました。［　X　］、寿司店を出てしばらく歩いてから、ベーシストはいきなりこう言ったのです。

「なんで日本人は、魚にいちいち名前をつけるんだよ？」

ボクは「え？」と聞き返しました。その時の彼の反応がこうです。

「フィッシュ・イズ・フィッシュ（魚は魚だろ）」

次回からは回転寿司でいいやと思いました。つまり彼は、寿司ダネの区別がついていなかったのです。魚は魚でしかなかったのです。

たしかに、アメリカ人は日本人ほど魚の種類を知りません。ニューヨークの寿司レストランでも、経営者が日本人ではない場合は、カンパチやハマチやツムブリを一緒くたにイエローテール、マグロもカツオもまとめてツナと言っている店がほとんどです。多くのアメリカ人にとっては、イエローテールという魚は存在しても、カンパチやハマチは存在しないのです。①ましてやそのハマチが成長具合によってワラサやブリと名が変わる出世魚だなんて、説明したところで「？」という表情になるだけです。

日本人は、生き物の名前を細かく知っているという点で、おそらく世界一の民族ではないでしょうか。魚の名前もそうですし、虫の名前や花の名前もそうです。②ちなみにこのベーシストは東部の名門大学の生物学科を卒業していますが、カブトムシもクワガタムシもカミキリムシも全部まとめてビートルと言います。区別をつけないのです。

日本人の男性なら、クワガタの国産種のすべて、カミキリムシも五つ六つは名前を知っていることだと思います。最低でも、シロスジカミキリとゴマダラカミキリの区別くらいはつくはずです。でも、日本のように虫や魚を愛する伝統がない欧米では、虫に対して二、三の言葉しか浮かばない人が一般的です。『昆虫記』のジャン・アンリ・ファーブルがフランス本国では必ずしも有名人ではないように、虫に対する情熱を他国で探すのはなかなかにムズカしいことなのです。

このベーシストの一件は、③言葉とはなにか？という問いかけに対して、ほとんど答えにも近いようなヒントを与えてくれているように思います。

人間は区別がつかないものに対しては、呼び名を持ち得ません。区別がついている事象に対してのみ、呼び名を持つのです。

その考えをあてはめると、感情に対して三つの言葉しか持てない人は、三つの感情しか区別がついていないと言えます。嫌悪の感情が全部「むかつく」になってしまうのであれば、その人にとっては［　A　］ことになります。逆に、揺れ動く心に対して百の描写ができるなら、その人はそれだけの心の姿の区別がつくのです。

言語とはすなわち、区別がつくかどうか。差異に根ざした表現なのです。

言葉とは差異に根ざした表現である。

これは言語学の父と呼ばれるフェルディナン・ド・ソシュール（一八五七―一九一三）が、言葉が存在することの根本理由を明かしていくなかでたどりついた答えです。

ソシュールは、二十一歳という年齢で「※インド＝ヨーロッパ語」という壮大な体系があることを各国語の母音の分析によって解き明かした天才です。どの言語がどの時代にどう影響し合っていたかという※樹形図を明らかにしていく比較言語学に於いて、ヨーロッパ言語のミキまでをも見出した人です。

言語学の分野に彗星のように現われ、なおかつ言語学そのものを世界的レベルで打ち立てたこのスイス人は、続いて一般言語学にターゲットを定めました。各国の言葉の成り立ちではなく、言語そのものに対する探究を始めたのです。

す。［　Y　］ボクら日本人は、だれかが「すずめ」と発声すればみな一応にそれぞれの頭のなかで「すずめ」を思い浮かべることができます。それぞれの「すずめ」の動的イメージは違うでしょうが、まず間違いなくそれは「すずめ」であって、「めじろ」や「うぐいす」ではないはずです。

このシンプルな共有認識はいったいどういう理屈から成り立つのか？ 一言語からなる民族はなぜ言葉とイメージを共通に持てるのか？ というのが一般言語学の解き明かそうとする方向性です。その結果、ソシュールが突き止めた言葉の正体。

それはベーシストの寿司の一件でも明らかになった、認識上の差異というものでした。

わかりやすい例をあげましょう。たとえばあなたが雪の積もった原野を旅していて、その雪面に対してなんらかの表現をこころみようとした時、どんな言葉が出てくるでしょうか。思いつくところで、「白い」「冷たそう」「かたそう」「まぶしい」といったところではないでしょうか。しかし、雪とともに暮らすイヌイットには、その表層の呼び方だけで幾十もの言葉があると言われています。［　Z　］彼らは、雪質や気温や風によって微妙に変わる雪原の見え方、その区別がつくからです。

区別がつく。そこに差異がある。だから言葉が生まれるのです。

日本には、雨に対する呼び名がたくさんありますね。［　B　］といったふうです。雨が多く、四季に恵まれた国土だけに、ボクらはその区別がつくのです。だからこれだけの呼び名が生まれました。では、欧米ではどうでしょう。たとえばカリフォルニアやニューメキシコで「雨の表現はいくつありますか？」と訊いても、④それはあまり意味をなさない問いになるはずです。まったくもって、あちらでは雨は雨でしかありません。せいぜいが「ヘヴィー・レイン（激しい雨）」や「シャワー（にわか雨）」といった程度。言い方はありますが、雨に対する細分化

がない土地では、その言葉数もぐっと減るのです。

宮沢賢治が雲をどう表現しているか。かつて草野心平がそれをまとめたことがありました。ここですこし引用しますと、「氷河が海にはいるように白い雲のたくさんの流れは枯れた野原に注いでいる」「向うの縮れた亜鉛の雲へ」「雲はたよりないカルボン酸」「雲には白いとこも黒いとこもあってみんなぎらぎら湧いている」「白い輝雲のあちこちがきれて、あの永久の海蒼がのぞいている」「雲はみんなリチウムの赤い焔をあげる」「雲の累帯構造の継ぎ目から一切れのぞく天の青」「燃え上がる雲の銅粉」「日はいま羊毛の雲に入ろうとして」「やまなしの匂いの雲」「蛋白質の雲は遥かにたたえ」「蒼鉛色の暗い雲からみぞれはびちょびちょ沈んでくる」……ああ、もう、詩人の目にはどれだけの種類の雲が現われたのでしょう。おそらく宮沢賢治にとっては、目にする雲はすべて違う雲であって、それは一回性の命との出会いでもありました。すべてに差異があり、だからこそそれぞれの形容になったのです。一般の人はしかし、いわし雲と入道雲程度の区別はついたとしても、ここまではいかないでしょう。まさに、差異がわかることが言葉を生むみなもとであるわけです。

（ドリアン助川『プチ革命　言葉の森を育てよう　岩波ジュニア新書７７９』岩波書店）

※さいなまれました……苦しめられました。
※ベーシスト……ベースという楽器を演奏するミュージシャン。
※査証……ここでは、外国に滞在するために必要となる証明のこと。ビザ。
※インド＝ヨーロッパ語……英語やフランス語、ヒンディー語やペルシア語など、インドからヨーロッパにかけての地域で話される言語の多くが属する言語グループ。
※樹形図……樹木のように枝分かれした形の図。
※草野心平……福島県出身の詩人。

問一　═══線部（a）～（c）のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

問二　□X～Zに入れるのに適切な語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　なぜなら　　イ　たとえば　　ウ　あるいは　　エ　または　　オ　ところが

問三　═══線部①「ましてやそのハマチが成長具合によってワラサやブリと名が変わる出世魚だなんて、説明したところで『？』という表情になるだけです。」とありますが、それはなぜですか。説明としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　多くのアメリカ人と同様に、彼もまたハマチやカンパチなどの魚をまとめてイエローテールという呼び名で認識しており、その分類以外で理解しようとすることを拒絶するから。

イ　魚の種類を細かく分けないアメリカ人の彼にとって、そもそもハマチという魚は存在しないのと同じで、その呼び名がさらに細かく分かれることを説明しても理解できないから。

ウ　アメリカ人の彼にとって、日本における魚の名前の分類を頭に入れるだけで精一杯であり、さらにハマチの呼び名が細かく分類されることを教えたとしても、覚えきれないから。

エ　魚の名前の細かな分類を知らない彼には、どの魚の寿司も同じ味に感じられてしまうため、さらにハマチの呼び名が成長により変わることなどを教えられても混乱するから。

オ　イエローテールなど魚を大きな分類で呼ぶアメリカ人の彼には、日本人が魚を細かく分類して呼ぶことはめんどうに感じられ、その意味がよくわからないから。

国１

問四　――線部②「ちなみにこのベーシストは東部の名門大学の生物学科を卒業しています」とありますが、この部分はどのような意図で書かれていると考えられますか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　寿司屋では魚の種類の区別がつかなかったが、アメリカの名門大学を卒業しているのだということを提示して、彼の名誉を守るため。

イ　ベーシストのいたアメリカ東部では生物の区別を細かくしないが、西部では事情が異なる可能性がある、ということを提示するため。

ウ　アメリカの名門大学を卒業したベーシストが生物を細かく区別しないということは、間違っているのは我々である、と強調するため。

エ　大学の生物学科を卒業した人は、生物を細かく見るのではなく、より大きなくくりで見ることができるようになることを伝えるため。

オ　このベーシストが無知なのではなく、日本と違って、アメリカでは生物を細かく区別しないのが一般的であることを強調するため。

問五　――線部③「言葉とはなにか？」とありますが、その問いに対する答えがもっとも簡潔にまとまっている一文を本文中より二十字以内で抜き出し、初めと終わりの三字で答えなさい。

問六　A　に入る語としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　怒りの言葉は存在しない

イ　「むかつく」という感情を理解できない

ウ　怒りの感情を表現する方法がない

エ　たった一種類の怒りしか存在しない

オ　何種類もの「むかつく」が存在する

問七　B　には、雨の様子を表す言葉が入ります。あなたが知っている日本語の雨の呼び名を二つ書きなさい。ただし、本文中にある「にわか雨」は使用できません。

問八　――線部④「それはあまり意味をなさない問いになる」とありますが、それはなぜですか。「区別」「差異」の二語を必ず用いて、五十字以内で説明しなさい。

国1

問九　次に示すのは、本文を読んだ後に、五人の生徒がそれぞれの意見を述べ合っている場面です。本文の内容に即していないものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア　（生徒Ａ）：言語学って堅苦しいイメージがあるけれど、本文では具体的な例が多く書かれているから、筆者の主張を理解するヒントになったよ。普段使っている言葉を改めて意識しなおしてみるきっかけになった。

イ　（生徒Ｂ）：最初はお寿司の話で、何についての文章だろうと思ったよ。寿司ネタの区別の話題を通して「人間は区別がついていることに対してのみ呼び名を持つのだ」ということを説明しようとしているんだね。

ウ　（生徒Ｃ）：筆者の言うように、確かにカブトムシやクワガタムシなどは、日本ではとても親しまれているという印象がある。生き物の名前を細かく分類できる日本人は、物事を観察し、分析する能力に長けていると言えるよ。

エ　（生徒Ｄ）：イヌイットが雪に対して呼び方をいくつも持っているというのは、驚きだなあ。筆者の主張によると、雪が身近な存在だとその様子の区別もつくから、自然と呼び名も多く生まれる、ということになるね。

オ　（生徒Ｅ）：こうやって見てみると、宮沢賢治は雲に対してとても多様な表現をしていることがわかるね。きっと雲の種類が多い土地で暮らす人は皆、賢治のように豊かな表現ができるようになるんだと思う。

問十　本文には、宮沢賢治の表現に関する記述があります。このように多彩な表現で書かれた文章を読むことには、どのような意味がありますか。本文の内容をふまえて答えなさい。

国１

国語解答用紙（第一回）

〔一〕

問一 ⓐ

問二 X

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問二 Y ⓑ

問一 ⓒ

〔二〕

問一 ⓐ

問二 X

問三

問四

問五 初め

問六

問七

問八

問九

問十

問二 Y ⓑ

終わり

しい

問二 Z ⓒ

50

40

20

総点
科目
国語
受験番号
氏名

（注意　字数に制限があるときは「、」や「。」も一字とします。）

キリトリ線